



尔說豹之卷

前

^ 13
2940
1



13
2940

門へ 13
號 2940
卷 1

風流あはれ... 大音の... 遊女... 善四... 善作... 善八

なま... 善四... 善作... 善八

善四... 善作... 善八

文雅二板
善四季
文雅一板
善作
善八

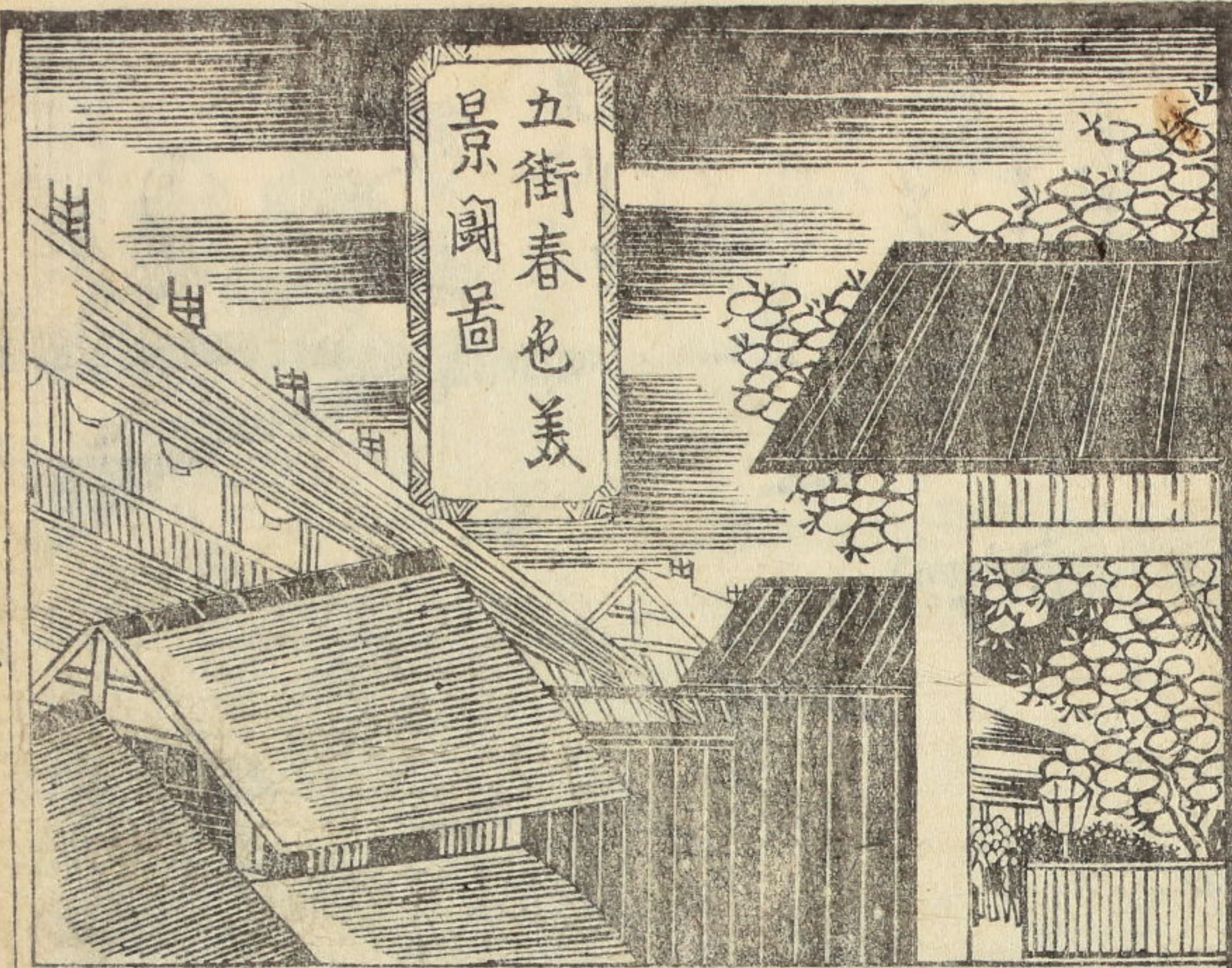
三改... 善八

○遊女善四季... 善八

○善作... 善八

吉本町... 善八

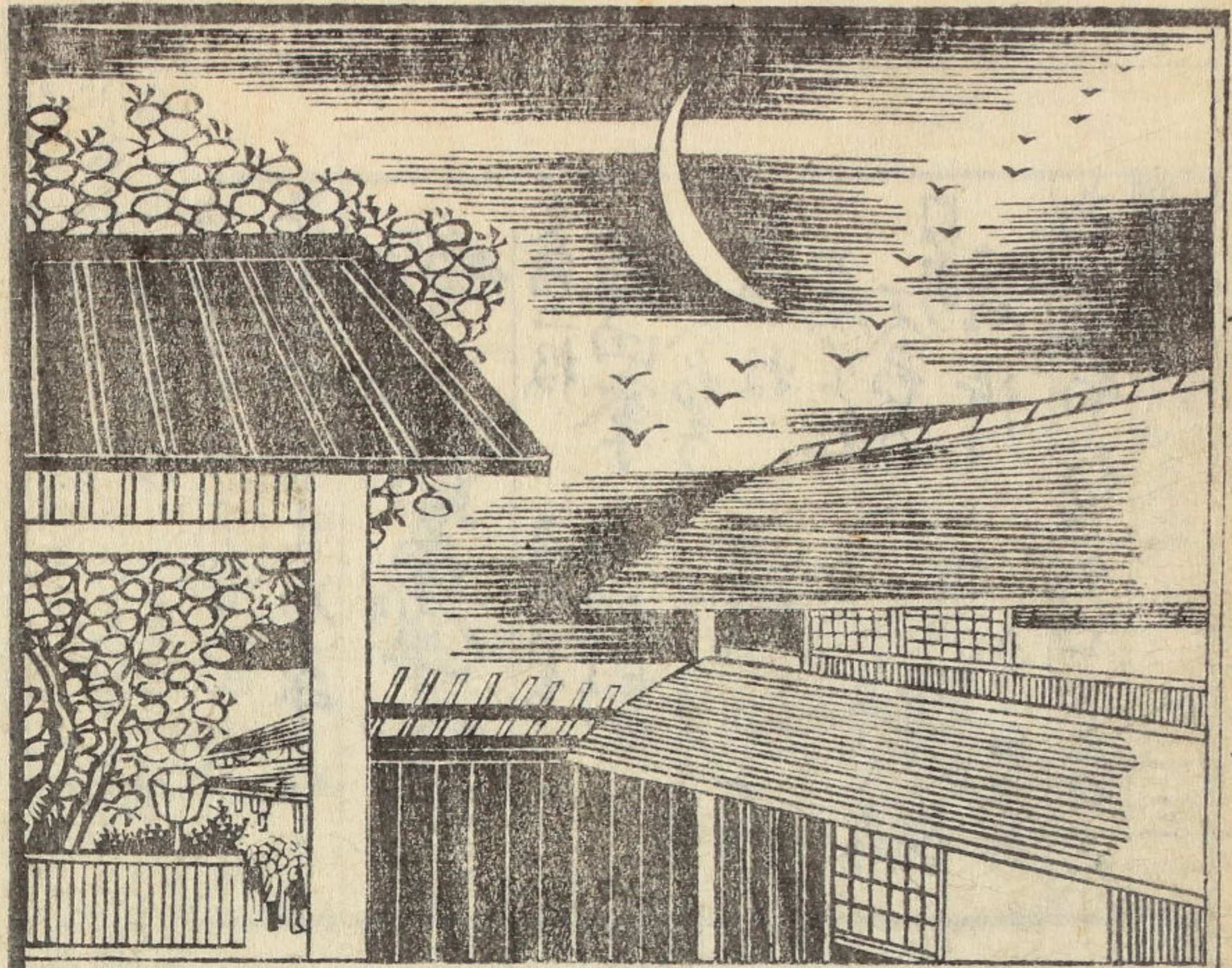
昭和九年九月九日 昭末



五街春色也美
景園音

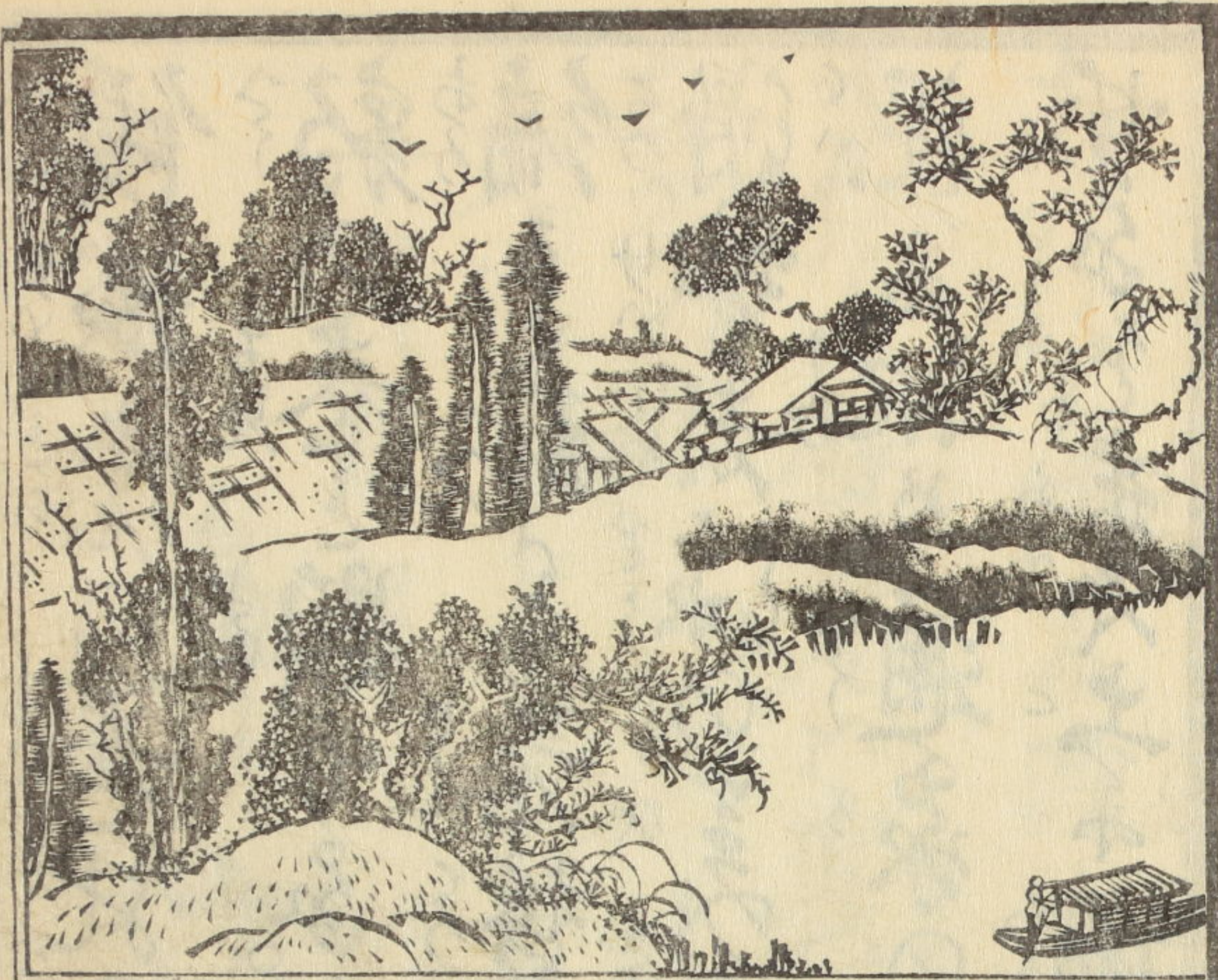
子葉の家の邊の中へ入りて
 行くと頂の森や大町終
 まで老の列やまのほと
 町へくしの葉も巻いて
 たる酒也酔つた女着
 ぬるふ不動の湯被り
 とある法徳の湯被り
 子を養ふ女も

○ 滝田屋紋女が傳
 宮戸川の辺へは
 子葉の家を出て
 舞の用を



大町大工の傳
 大町大工の傳
 大町大工の傳
 大町大工の傳
 大町大工の傳
 大町大工の傳

○ 大町大工が傳



るのまじし

右の五章の傾城豹の巻
 の要ありて執向の魂外を
 先不ま直を救拳をすの
 高階人の君子よしく
 おい孫がみの



免はら
 みのと
 ちうしん
 みやあま
 人
 かゆで
 すぎ川
 東里山人

舟のまじし

下総の國多田影元相村乃
 生れやと初めの時不
 美あひ伯母ある君の
 好々嗟嘆口論の有持
 一と我輩の兵のふ伯母

傾城虎の巻に威光が散り
 豹の巻と題せらる。ふ束を以て冊と
 編るも却て先哲の名を釋し
 滑流若流の美玉と稱せるは汚
 泥に沈み通家の明珠と稱重
 せんまをと書かす土に墜し千金の價

あらも終に煙滅と聞ゆる事
 きたるも譬をんが實に多羅と

文政十丁亥の年
 十月新版

鼻少人

誌



此の巻は上



信九政 菱川 口口

千葉そんち
大町大之郎

菱川 政信画 (信)



若葉屋
若四郎

珠説豹之巻目録

上のまた

動くふ名もたりのし智ふあらず
兩國の梅ふらつるや
或人の暗

中のまた

人の窮するふ棄する者不仁あらず
常の歳りも捨て初まらぬ
強小遠の弱を凌ぐ者不勇あらず
英風や磐ちあもあつる塊
亮

下のまた

双上三巻

珠説豹之巻上

鼻山人著

○動く名もたりのし智ふあらず

夫傾城とひとよの中もむべし
よつばさよ人を沈むるもあれが
娘もあつ又生れ替へた智叢明ふあつ
累の番ふあつて全巻の先法を
もあつ難しとつやその
吉あつとのむじ今の

揚町首領金町の辺にあつては女め練を練成
用ひ客の一日一子産み凍りたる時代の比
毎基りくが抱ひの柱女若四季とらるる者の比さ
身を沈めしつゝその娘の縁を尋ねるふ父か子孫
家の遺中室山まなろとらるる者あて娘端も僅
二十を頂戴あつて猪ひ方の徳堂もあまの娘
次勉めりるがある時滝神を致女とらるる用盡の
降しつ令み平あひし妙言をさるる海に連中
て

おのゝ無常ふとれ嘆惋あつて右の妙言
成業のふれしものはまるゝく好のふたふれ
致女方あて十分の純もふあひ能持かんのふど
は不根籍の無常ふとれ成業のふれはまるゝく
ち切あるま君の用金とをさるるのふれあやま
は然神の海もたらまら神と只惘然と途
ふさるるわせめと角やせめと血脈ふあつて
この者を捜せしめとや何あつて途まらぬ
て

へんがれが後ふ宮を川ふぬをの扱と死あへぬ
 ト押のひ室ありしうたすびの妻子の巻あものりされ
 着入監獄のあふ査あれしうの姫を洋うふ
 重役の者あの中立て後のきだよく切後とあふ
 吾飛のあふ中込あのあるごとと押のひあへ
 凄冷と吾室をさうて立ぬりせしう一通の
 出向を偲めて女がうおせし縁を備きく拒死
 審らふ吾今日の張つを告く去切あるは用金を

切後とそものや次をするより
 外不思事あはるし後途申ふあめく死あんと
 まて押のひ借しうがせられあての實者あのだうふ分ら
 する残り惜しう押のひ且大死あふん中急あふ
 是娘あはるし立通しう我果て後ば出向
 大町勢母さぬ方持業あし後切と起し
 押のひまきをヤ述られよしと押のひ借しうあふ
 女がうおと縁も且張しき且あしとまふあふく

ありあまる災難あまなるわざ命いのちを捨すててのや次つぎとよくし
 るのちがらその由よし命いのちをさへ續つづひあがめぬのよね
 みの押おしのびますすまのいままくいままその命いのちの二程にほどど
 おきんすぞふト刀やいば持もてふふを推おり同どうじと和わみ
 云いなる日ひは其その方かたが知しらせり共とも好こののころち
 より傳つたる大おほきを引ひ出だす面めん目め次つぎもあはる
 ちがら由よし命いのちをさす瀧たき舟ふねを方かたより信しんぶ来きり
 一ひと由よし命いのちをさすあうらざるみ千ちふ小こ女に老らうの者もの

さあちあうく 驕おごひ出いでんぎ知ちちあもひ辰しんも
 ちく淡たん休きゅうのめのおとりの知ちり入いる船ふねをうのり
 被ひのふふ春はる書かきつれもかひひる立た難がたしや今いま又また
 押おのりぬ海うみをうへ一ひと重かさ持もてんののちの附つく親おやの終はつ日ひ
 意い日ひでも精せいをトとりふ文ぶん書かきふ交まじり合あひ付つね板いたト
 減へすは利きちじて位ゐ牌はいを釋はなせし得えがあらう
 ちをうの命いのちを武ぶ軍ぐんふあはるあひの仕し合あひ
 ト押おのりぬ洞ほら小こ洞ほらを岡おか且かつぐおを移うつるあひは洞ほら

おのむすを扱ひ置てこそかまらざりし中へも
 さいすくひりもさうくもあらざりし中へも
 なかみと扱ひ置てこそかまらざりし中へも
 せし扱ひ置てこそかまらざりし中へも
 すのむすを扱ひ置てこそかまらざりし中へも
 こしひを合せし中へも
 ひらく扱ひ置てこそかまらざりし中へも
 おさく申来りし中へも

解小郎の血縁の事
 一夫の命を扱ひ置てこそかまらざりし中へも
 親の懇願の事
 孫れし中へも
 申しはしむる事

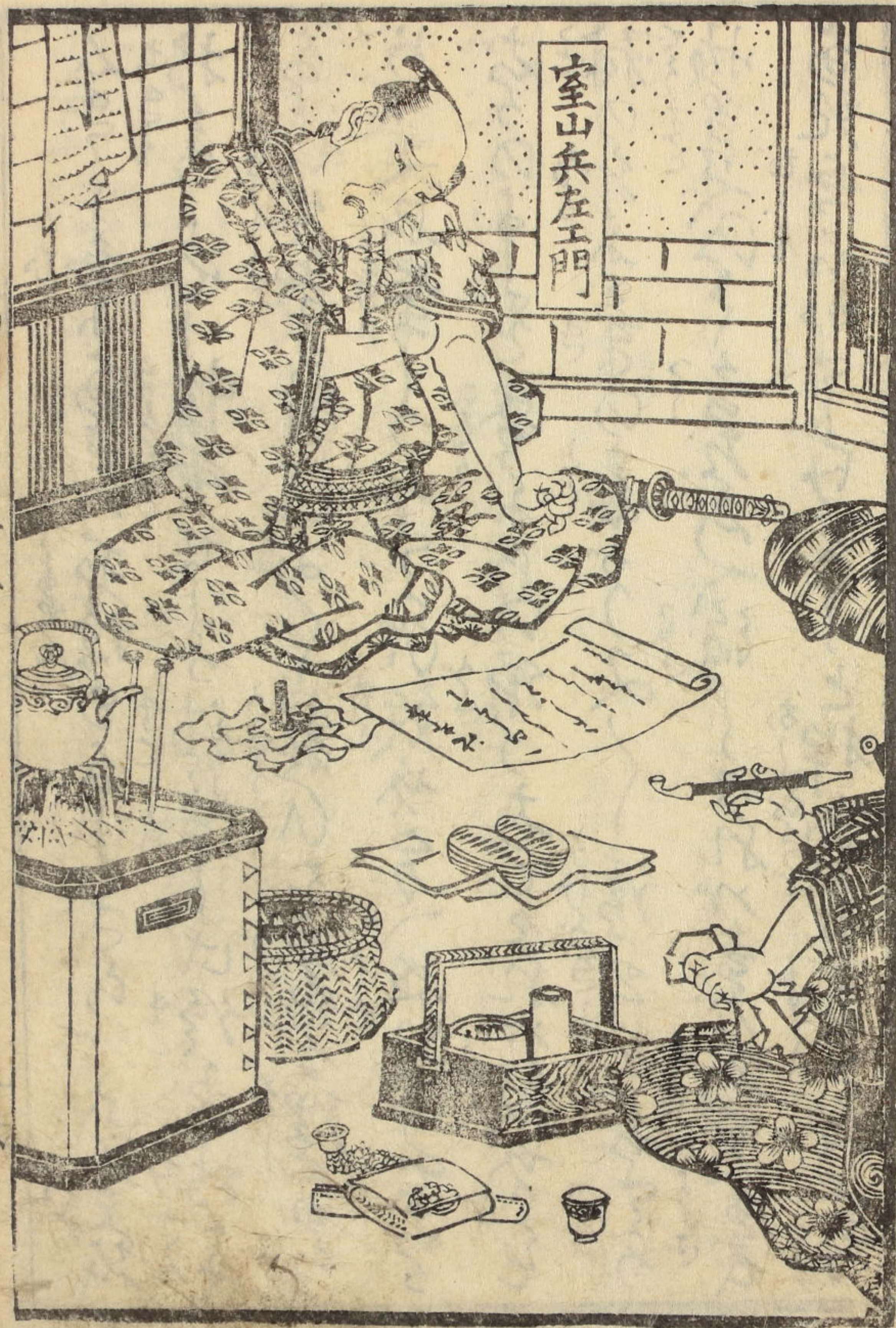
あまのつが あまのつが 壺五のふんの強合よりあまのあひ造る
まの固を括さば親子の別を懸うらんと目
増を利てマモシクは通のあまの令成
お流しやせしうのよやまはあまのの
まのあまの御日のつりあしもの代りのの連を
ます免角あんなるゆあすい言入魔入令と
しあふすからしく一組での有縁のあまのあ
あまのつが あまのつが けりしとあまの母にけりし由るあまの

あまのつが あまのつが 壺五のふんの強合よりあまのあひ造る
まの固を括さば親子の別を懸うらんと目
増を利てマモシクは通のあまの令成
お流しやせしうのよやまはあまのの
まのあまの御日のつりあしもの代りのの連を
ます免角あんなるゆあすい言入魔入令と
しあふすからしく一組での有縁のあまのあ
あまのつが あまのつが けりしとあまの母にけりし由るあまの

をなれも別不仕^{かろ}ては^ぶせま^しす却^{かへ}てふ^ん影^{かげ}
のその形^{かたち}が市^{いち}近^{ちか}い月^{つき}のま^まぬと^と執^と事^じは^まく
如^{ごと}く^くす^すが^がち^ち地^ちが^がら^らあ^あき^きから^ら釋^{はな}る^る男^{おとこ}と
あ^あら^らま^まく^くお^お田^た子^この^のま^まく^く一^いの^のま^まく^く
泣^なれ^れの^のま^まく^く悟^{さと}ら^られ^れて^て一^いの^のま^まく^くと^と鏡^{かがみ}の^のま^まく^くを
あ^あす^すに^に鏡^{かがみ}の^のま^まく^くだ^だあ^あき^きの^のま^まく^くの^のま^まく^く
お^おき^き我^{われ}も^もあ^あき^きの^のま^まく^くと^とあ^あき^きの^のま^まく^く
一^いの^のま^まく^くあ^あき^きの^のま^まく^くの^のま^まく^くの^のま^まく^く

耳^{みみ}の^のま^まく^くの^のま^まく^くの^のま^まく^くの^のま^まく^く
こ^この^のま^まく^くの^のま^まく^くの^のま^まく^くの^のま^まく^く
母^{はは}の^のま^まく^くの^のま^まく^くの^のま^まく^くの^のま^まく^く
城^{しろ}の^のま^まく^くの^のま^まく^くの^のま^まく^くの^のま^まく^く
早^{はや}の^のま^まく^くの^のま^まく^くの^のま^まく^くの^のま^まく^く
の^のま^まく^くの^のま^まく^くの^のま^まく^くの^のま^まく^く
火^ひの^のま^まく^くの^のま^まく^くの^のま^まく^くの^のま^まく^く

あきこ



室山兵左門



おしんが母

むすめ
お四季

若葉や高き

甘藷川政信再信

おしんが母

十一

んぎ〜奪ふちのびる玉珍のあ〜さらびは金銭
 持多〜と懐申せ〜が納付〜は後を持多
 あ〜はるす時〜く〜を豊か〜はる
 りト又良案〜う〜び致女方〜致〜てあ
 ちうのよ〜を奪ふの得〜あ〜致女を
 殊のふ〜業の毒〜又〜はる〜あ
 致女方〜〜はる〜はる〜あ
 あ〜ふ〜と押載〜あ〜はる

戻りて右の扶管の中〜金子を入封を付〜いふ
 も致女方より〜致〜る解あ〜を致〜り
 信の方のま〜ある役人の前〜持多は〜今日
 致女方の西使の途中〜あ〜持多〜はる
 下はの歩〜あり難〜れ〜あ〜療治
 乞彼〜はる〜刻信〜はる〜び
 あ〜と直〜中〜速〜彼扶管〜はる
 る〜役人の後〜入〜遅刻〜不

あつてさうして白洲を渡り富山まで来たを尋ねて
見ればその中より頼母威美をひきかきまゝに出して
ヤイと云ふ所の方と見えし宮戸川ある滝井や
彼の方へ金子清丸の侍のふたり載しお途中に
おのゝ盗神のあふ右の杖管を奪ひしと云れ終方
あつた娘が女を奪はんと云ふ所の金子をばくしの
おのれが罪をばくしの隠せるものゝ風あるおの
おのれは清丸のまゝにさうして中へ直たればまゝに
かゝるのあつたものもあると云ふ

かゝるのあつたものもあると云ふ海軍に
あれど先某がおのれをさうして小舟をばくした
ちかちかの世に人帯刀あつた者が白合小次郎の
難をさうしてさうしてまゝに復讐の者あつて
そのおのれはあつたものの中へいりておのれを
おのれはあつたものの中へいりておのれを
まかしのおのれをさうしておのれの焼く
おのれはあつたものの中へいりておのれを

あ〜と母のどこのか一己のへるあまの海一箱くれ
を新あ〜一通し〜
娘と〜
宅小〜
あ〜ん〜
て着あ〜
苗分の内〜
あ〜推帝の〜

あ〜と母のどこのか一己のへるあまの海一箱くれ
を新あ〜一通し〜
娘と〜
宅小〜
あ〜ん〜
て着あ〜
苗分の内〜
あ〜推帝の〜

慢るも是れ乳す小程まをのりてす寛の程
或海の程まの旁に或海の是をのりてく
和すすすよ大徳のめりてく楽あが仁者の化を
絶すれ和くあつ過ちあつて海せざるをたれ悪
懼すすトりのあが程く一程すぬ小物本くれが
絶ふ熱母がそ程画くくらず固く切あつた名
たけしぬた程くく天のると是よりくくく
めとくひま日ぐ一歩はのまのくれが程ひひまのせ

家老徳は免れせられ居る若戻小樂勉の
身と如くく乳妻の辟まをさけみくる取くもの
中本もさるく又新玉の妻の中旬定山まを
娘のお四季吉原町ある若義を命其めくが抱えの
程の今程の免中あつてゆけれ程じ樂あては
のくもたすすづるも程の程あてはひま娘
ちとあつて風俗とらひ合好とらひおのぼら

程の程

九三

うらぶと判別御小書す〜と風又〜あり
 うれば終不物控骸の耳も入りきりつがらる
 上代傳の大羅人伝ふされま〜はる大町新田
 が縁縁し御し〜あ〜は〜下は〜
 流ふらひ括〜し高年輩のふりま〜のふ縁ある
 在女町(ま君の名ま〜)も出せ〜その羅加ろ
 うらぶと〜も不離のあ〜あ〜子孫の面形哉
 追拂のれくれがきり〜ま級入者不〜るるんん

して且野死上忠〜おのれが〜たる羅ト入
 あから係る清ま〜死とあ〜るのりひもあま
 是とらふも〜形母さぬの由段を辞〜あひ〜
 よう由段も妹の介小岩〜くありお慈恵入
 愛をうもあ〜く昔界の娘が母の〜人支親が
 幕の旗とあ〜いとあ〜が〜やあ〜おのりあ
 親のあ〜と〜を〜も今入却〜岐のたひ
 親〜のうと〜あ〜る係る〜たあ〜らあ

源の巻

六

先祖の尋り足帳もあやと潤小纏る口ツのそで
 ひろるらぶせれた身の浪穿ゆるんまの方面おざれ
 を後方ある子よ小瀧世や紋女を鳴らして宮戸川
 の辺うあてぬ久二るの店を借細き燐の忍び
 ぎらもあぬあを清くのまあまのう解入の念の
 あらざれば女をうあそ孫がぬれをほじめ櫛并
 くらまのぐ一ツあ久二のあまのまの櫛あまの
 換て替の口をふじしがあまのまの櫛あまの

りと替れぬぬ小瀧とてまのまのぬあまの
 あくやあまの夜のまのまのすまのまの涙のあまの
 歌ての居家の果あまのまの道とてあまの
 てあつせあつて店屋のまの角がまのせんとあまのくとの
 さすうがまのまのまのまのまのまのまのぬじさま
 有の櫛あまのまのまのまのまのまのまのぬじさま
 人のまの櫛あまのまのまのまのまのまのまのぬじさま
 とあまのまのまのまのまのまのまのまのぬじさま

るのあまのまの

六五

勢のきり

すこ
少くは十四經のなるものありしを毒ひと目の
くれざ
そる方より海より出るとまきく放れし町家と
あま
按麻のそりてつらつらの残を費ひあま
ちん
後入の口とせしは
す
い
ある宿世の因りあや親と
た
た

珠説豹の巻上終



